九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドの韻文詩「海辺の墓にて」

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/2556321

出版情報：Stella. 38, pp.297-306, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドの韻文詩「海辺の墓にて」

吉　井　亮　雄

「詩においてはマラルメ，演劇においてはメーテルランク――そしてこの二人と並ぶといくぶん小粒な気はするが，小説においては《僕》と付け加えよう」[1]。処女作『アンドレ・ワルテルの手記』（1891 年）の出版を目前に控えたジッドが，知り合って間もないヴァレリーに書き送った自負の表明である。とはいえ同時代の文学青年，とりわけ象徴主義の洗礼を受けた文学青年の例に漏れず，彼もまた詩を読むこと，詩を書くことに強い関心を寄せていた。たしかに冒頭の宣言が謳うように，やがては小説や批評に創作活動の主軸をおき，詩の実践からは遠ざかってゆくが，「詩人」としても認知されたかったという思いは後々まで彼のなかに残るのである[2]。

そのようなジッドが詩作にも相応の労力と時間を割いていたのは主として 1880 年代末から 90 年代，すなわち成人前後から 30 歳頃までのことで，学生同人誌『ポタッシュ＝ルヴュ』にザン＝バル＝ダルの変名で発表した「雨色の 6 行詩」に始まり，韻文を多く含む上記処女作，翌年出版の『アンドレ・ワルテルの詩』や，『ラ・コンク』『ラ・ワロニー』『フロレアル』『ル・サントール』『レルミタージュ』などフランス・ベルギーの文芸誌での詩篇掲載を経て[3]，詩と語りとが豊かに共鳴する『地の糧』（1897 年）においてひとつの到達点を見た，そう彼の詩歴を約（つづ）めてみても大きく過つことはあるまい。

雑誌掲載された詩篇の多くは後年の新フランス評論版『ジッド全集』（1932 年に配本開始，大戦勃発のため 39 年の第 15 巻で途絶）に収められ，一般の目にも触れやすくなったが，内いくつかは新旧のプレイアッド版『作品集』をはじめ，今日までどの刊本にも再録されていない。表題に掲げた「海辺の墓にて (Sur une tombe au bord de la mer)」はそのひとつである。本稿執筆の企ては筆者がたまたま最近，市場に出た同詩篇の自筆稿を実見する幸運に恵まれたことに端を発する[4]。もとより論述の対象としては小さな題材ではあるが，これ

を機に試みの無謀なるを顧みずその日本語訳を提示し，あわせて詩篇の成り立ちについても若干の実証的補説をくわえたい。

*

「海辺の墓にて」は12音節（アレクサンドラン）・64行からなる詞藻優美にして技法的にも相当に熟（こな）れた韻文詩である。発表媒体は南仏モンペリエで発行されていた小雑誌『ラ・クップ（盃）』で，詩篇は1898年6月，その終刊号の巻頭を飾った（同じ号にはエマニュエル・シニョレやエドゥアール・デュコテ，エドモン・ジャルーらの名が並ぶ）[5]。ジッドはすでに3年前，同誌の創刊第2号に「大気は海原で歌っていた «L'air chantait sur les flots...»」で始まる無題の短詩を載せていたが[6]，このたびの寄稿は一段と読み応えのある完成度の高い作品である。

『ラ・クップ』は，1874年生まれ，まだ成人して間もない青年詩人ジョゼフ・ルーベが1895年の春にモンペリエで創刊した文芸誌。「芸術・倫理の月刊誌」を副題に掲げて，南仏全域ばかりか，パリはむろんのこと，フランス語圏ベルギーなどの詩人や作家に寄稿を求め，途中2度の休刊をはさみながら，3年間で計15号を発行する。創刊号にはアンリ・ド・レニエとアルベール・サマン，第2号にはフランシス・ヴィエレ＝グリファンやシャルル・ゲラン，トリスタン・クリングゾル，そして上述のようにジッドの名が並ぶことからも分かるように，象徴派の作品，とりわけ詩を好んで掲載した。ルーベ自身は兵役に続く就業のため早くにパリに居を移したが，友人のアルベール・リエナール（マルセイユ），リシャール・ヴェモー（モンペリエ）の協力を得ながら，地方文芸誌の旗を掲げ続けた（じじつ同誌は終刊まで一貫してモンペリエで印刷される）。比較的短命に終わりはしたものの，その執筆陣としては，最晩年のマラルメや同郷のヴァレリーをはじめ，象徴派主要メンバーのほぼすべてをカバーしていたといっても過言ではない。その意味でも同誌の文学史的な重要性はあらためて認識・強調されてしかるべきであろう[7]。

本論述の対象作について――。ジッド研究の第一人者クロード・マルタンによれば，当該詩篇にはもうひとつ別に「死者たちの踊り／海辺の墓にて」と題された同一内容の自筆稿が存在しており（故カトリーヌ・ジッド女史旧蔵），そのタイトル並記からはジッドが詩篇を連作詩「死者たちの踊り」の一篇（最終

第5篇）と位置づけていたことが窺われるという[8]。いっぽう筆者実見の自筆稿については，物理的側面が分かっているのでそれを記録しておくと，縦20.5×横13センチの極薄用箋4葉（細い線状の漉き入り）。いずれの紙片も別丁として台紙，いわゆる「足（オングレ）」に支えられ，背布の厚表紙装丁（カルトナージュ）に収まる。詩篇そのものは黒色インクの整然とした極細字体で清書され，表面（おもてめん）3枚半を占める。編集者や植字工による組版にかんする書き込みはない[9]。また第4葉の裏面には黒色インクの太く大振りな字で短信が書きつけられている（なお，原稿を発送した封筒は保存されておらず）。まずはこの未刊書簡の紹介から始めよう。

ジッドは1898年の1月初め，妻マドレーヌとともに旅先のスイス・ローザンヌを発ち，マルセイユに到着。次いでイタリアへと向かい，フィレンツェ，ローマを経て，4月初旬からはヴェニスに滞在していたが，彼の地からパリのルーベに宛てて送られたのが次の書状である――

ヴェニス，〔18〕98年4月15日

拝略

有難いご依頼を頂戴しました。お礼申し上げます。

詩句若干を同封いたします。〔お申し出のように〕これらの詩句が『ラ・クップ』誌の巻頭を飾るとなれば誠に光栄に存じます。

私が貴誌の各号を注意深く拝読しておりますこと，そして，あなたがいくたりかの稀有な精神の持ち主（rares âmes）の共感を勝ち得えられたのは，なにもあなたが彼らに示した共感のゆえだけではないということをどうかお信じください。

私は衷心よりあなたと共にある，そうご承知おきいただきたく。

アンドレ・ジッド

この書簡からは詩篇が『ラ・クップ』誌側の要請に応じたものだったこと，早くから定期的に献本を受けていたのだろう，ジッドが同誌によく目を通していたことが分かる。また彼が言うところの「稀有な精神の持ち主」のなかには，すでに触れたように，マラルメをはじめ，ヴァレリーやレニエ，ヴィエレ＝グリファン，ヴェラーレンなど，彼の師友が少なからず含まれていたのである。

続いて詩篇自体に話を移せば，自筆稿と初出印刷テクストとのあいだに語選択のレベルでのヴァリアントは皆無。微細な異同として，前者の数カ所で統辞法上あってしかるべき読点が欠けるが，それらはいずれも雑誌掲載時までに正されている（連結符の欠落1カ所についても同様）[10]。このことを断ったうえ

で，さっそく詩篇全文の日本語試訳を示そう（フランス語原文については稿末に『ラ・クップ』誌掲載ページの複製を掲げる）[11] ——

海辺の墓にて

（『詞華集（アントロジー）』を模して）

ここに澄んだ水が流れている。
　異邦の人よ！　飲みたまえ。
急ぐのだ！　自然は
　　君のために
ほんの一時（ひととき）しか永らえぬ。
陽光のもと　見たまえ
　　舟また舟が，
晴れの日には，
　　遠ざかってゆく
鳥たちのように，——
そして夕べには港に帰る。
異邦の人よ，
歓びも愛も希望も
　　墓の彼方には
もはや青々と茂ることはない。
美徳も，彼方では，無力。
私は，死せる私は君に
死者たちの秘密を届けよう，
我が羨望の的たる
　　生が
君の目に映るように
　　いっそう美しく
いっそう希少な幸として。打ち明けて言えば，
死後に続くものなど
　　何もないのだ。

異邦の人よ，聞きたまえ。
もはや道もありはしない，
　　彼方には。
かつては　一艘の舟が
　　我が忠実やかな魂を
不凋花（アスポテロス）の咲く野に

運んでくれるものと信じていた。
そは真ならず。
〈冥界〉には
舟もない。
〔審判官〕アイアコスも
渡し守〔カロン〕もいなければ,
番犬ケルベロスも
死者たちを裁く
　　厳格な
ミノス〔王〕もいない,
不凋花も……
忠実(まめ)やかな魂も
ここでは何ほどにもならぬ――
わずかばかりの灰にすぎぬ
いかに待とうとも
　　永遠に。
この暗き夜の
終わろうが続こうが
　　永遠に。

口を利けぬ者に代わり
もはや私はあまりにも語りすぎた。
この口上が君の心に触れるならば
　　幸いだが！
今や急ぎ君に告げることにしよう,
　　さらば，と。

心ゆくまで味わい尽くせ
細やかな愛を
甘美なる歓びを,
忠実やかな魂が
かつて愛したものに
ふたたび巡り逢うことは決して
　　決してないのだから。

タイトルに続く添え書きは，言うまでもなくその詩篇群が人口に膾炙した『ギリシア詞華集』（別名『パラティン詞華集』）を指す。じっさい前年（1897 年）5 月のジッドの日記や自伝執筆用の準備ノート『私自身と他者たちについて(デー・メー・イプセ・エト・アリイース)』

は，彼が友人のロシア人東洋学者フェドール・ローゼンベルグとともに，同『詞華集』第7巻「哀悼歌」の数篇を読み，「尋常ならざる」感銘を覚えたことを記している[12]。なかでも「海辺のこの墓は（Ce tombeau sur le bord de la mer）」と始まるガイトゥリコス作の第71番歌が本詩篇のタイトルの着想に寄与した蓋然性は高かろう[13]。

詩篇執筆の契機となったのは『ギリシア詞華集』の読書体験ばかりではあるまい。というのも，ジッドはほんの一月（ひとつき）ほど前，「ローマにある寂しい小さなキーツの墓」を訪れたさい[14]，そのほとりで英国詩人の『小夜啼鳥（ナイチンゲール）への頌歌』から次の詩節をえらび，感慨をこめ朗唱していたからである――

> 嗚呼（ああ），誰が私にワインを一口飲ませてくれるだろう――長いあいだ深い地のなかで凍えているこの私に――花の女神フロラや緑の野辺，プロヴァンスの歌や踊り，太陽に燃える歓喜の香るワインを？――嗚呼，暖かい南仏（ミディ）の溢れた盃を誰が私に与えてくれるだろう？

翌々年発表のブリュッセルでの講演録『文学における影響について』が当該詩節の引用を添えて喚起するように[15]，文学的巡礼とも呼びうる異国での墓参はジッドのうちに強い印象を残したが，それにもまして我々が注目すべきは，死者が生への郷愁・羨望を切々と詠ったこの一節と「海辺の墓にて」との否定しがたい主題論的類縁であろう。

フランス文学が1890年代半ばにひとつの転換期を迎えていたことは疑いを容れない。科学主義とその文学的変奏たる自然主義は，さまざまな分派を生みながらも依然として堅固な基盤のうえに立っていた。いっぽう象徴主義はたしかに一時代を画したものの，マラルメ提唱の諸理念を絶対の規範と仰ぐ傾向は次第に弱まり，むしろ過度に〈生〉から遊離した芸術にあらがう動きが勢いを増してくる。年長世代を麻痺させていた観念的美学に代わり，生への渇望が青年たちを突き動かし始めたのである。言語表現のレベルでは未だ象徴主義の影響の下にあったが，そのジッドもまたこうした新たな流れのなかに身を投じてゆく。結局は賛同・合流することはなかったものの，「生への回帰」「自然への回帰」を声高に謳ったサン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ主導の文学運動「ナチュリスム」にたいし，『地の糧』執筆中の彼が強い関心を示したのもそのために外ならない[16]。すでに触れたように同作はジッドの新生面を切り開いた詩的結晶

だが，翌年の「海辺の墓にて」はまさにその「生の熱情（フェルヴール）」を引き続き宿して唱う一篇だったのである。

註

1）Lettre d'André Gide à Paul Valéry, du 26 janvier 1891, dans leur *Correspondance (1890-1942)*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, 2009, p. 52.

2）この種の思いは演劇の実践にたいしても同様であった。『カンダウレス王』上演の失敗（1901 年のパリ初演の不評，そしてとりわけ 1908 年のベルリン公演の惨憺たる結果）以後,「公衆」にたいし強い警戒心をいだき，長らく戯曲の創作から遠ざかることになったが,「劇作家」としての認知を諦め切れなかった彼は，最晩年に至って全 8 巻からなる『演劇全集』（スイス・ヌーシャテルのイド・エ・カランド出版, 1947-1949 年）を世に問うのである。

3）最初期の詩作活動については次の論文を参照―― Alain GOULET, « Les premiers vers d'André Gide », in *Les débuts littéraires d'« André Walter » à « L'Immoraliste »*, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 1, 1969, pp. 123-149.

4）なおこの自筆稿は，筆者の承知するかぎり，現在までに少なくとも 3 回は古書市場や競売に現れている。すなわち最初は 1980 年 6 月，パリのアンリ・サフロワ書店の販売目録，次いで 2015 年 12 月 17 日，パリ・サザビーズでの競売，そして 2019 年 1 月，インターネット市場での個別出品である。

5）André GIDE, « Sur un tombe au bord de la mer », *La Coupe*, [3e Série]. 3e Année, n° 6, juin 1898 [n° 15], pp. 89-90.

6）なおこの短詩（[Poème sans titre], *La Coupe*, [1re Série], n° 2, juin 1895, p. 24）は，後に「5 月」と題され，新フランス評論版『ジッド全集』第 1 巻に再録される（若干数のヴァリアントあり）。Voir les *Œuvres complètes d'André Gide*. Édition augmentée de textes inédits, établie par Louis MARTIN-CHAUFFIER, t. I [1932], p. 259.

7）『ラ・クップ』誌の詳細については次の書誌を参照―― Jean-Michel PLACE et André VASSEUR, *Bibliographie des Revues et Journaux littéraires des XIXe et XXe siècles*, Paris : Éd. de la Chronique des Lettres françaises, t. I [1973], pp. 333-349 (« *La Coupe* »).

8）Voir Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De « Paludes » à « L'Immoraliste » (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, pp. 603-604（nos 16 et 20）.

9）次段落で述べるように，ジッドはこの自筆清書稿をパリのルーベに送るが，そこに編集者や植字工による組版上の指示がいっさい記入されていないことを思えば，受

信者が当該稿（および，これと一体をなす後掲の自分宛私信）は手元に置き，モンペリエ側にはその転写テクストを回した蓋然性が高い。

10）初出印刷テクストにたいする読点や連結府の異同を丸括弧内に示すと――
V. 12 : Étranger, la joie,（行末の読点欠）
V. 15 : Plus au-delà du tombeau（連結符欠）
V. 17 : Moi, mort je t'apporte（読点欠）
V. 18 : Le secret des morts,（同上）
V. 63 : Ne revoit jamais,（同上）

11）本詩篇の日本語訳出にあたっては，ヴァレリー研究で瞠目すべき成果を挙げておられる鳥山定嗣氏（名古屋大学人文学研究科）のご助力・ご教示をえた。ここに記して同氏への深甚なる謝意を表する。

12）「『詩歌集』の哀悼歌を数篇読む。ほかの詩篇は読むに及ばず。これら墓碑から受ける印象尋常ならず。我々はとある墓地のなかを散策した」（André Gide, *Journal, I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », p. 267［28 mai 1897］）。また，この『日記』新版による情報に先立っては，クロード・マルタンが『私自身と他者たちについて』（当時は未刊）のなかに同様の記述が認められることを指摘していた（voir Claude Martin, *op. cit.*, p. 236）。なお，同準備ノートは最近そのごく一部が抜粋版として公刊されたが，当該記述は採録分のなかには見当たらない（voir *De me ipse* et autre textes préparatoires inédits. Présentés et annotés par Pierre Masson, Paris : Orizons, 2013）。

13）なお詩篇全文の日本語訳は次を参照――『ギリシア詞華集』2（沓掛良彦訳），京都大学出版会，「西洋古典叢書」，2017 年，49 頁。

14）Voir la lettre de Gide à Marcel Drouin, du 16 mars 1898, reproduite dans *Romanische Forschungen*, vol. LXV, n° 3-4, 1954（« Zwei unbekannte Briefe von André Gide »), p. 412. Voir aussi Claude Martin, *op. cit.*, p. 269.

15）André Gide, « De l'Influence en littérature », *L'Ermitage*, mai 1900, p. 332. この韻文詩の日本語訳出に当たっては，ジッド自身による改行なしの引用に従う。

16）ジッドと「ナチュリスム」との関係については，拙著『ジッドとその時代』（九州大学出版会，2019 年）の第 I 部・第 4 章「ジッドとナチュリスム――サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエとの往復書簡――」を参照されたい。

Sur une tombe au bord de la mer

(Imité de l'*Anthologie*)

Ici coule une eau pure.
Étranger! bois-en;
Hâte-toi! la nature
Ne dure
Pour toi qu'un instant.
Au soleil regarde
Les barques,
Si le temps est beau,
Qui s'écartent
Comme des oiseaux, —
Puis rentrent le soir.
Étranger, la joie,
L'amour ni l'espoir
Ne verdoient
Plus au-delà du tombeau.
La vertu, là, n'a plus de force.
Moi, mort je l'apporte
Le secret des morts,
Afin que la vie
Que j'envie
T'apparaisse alors
Plus belle,
Un plus rare bien,
Si je le révèle
Qu'elle n'est suivie
De rien.

Étranger, écoute:
Il n'est plus de route,
Là-bas.

Je crus qu'une barque
Transporterait
Mon âme fidèle
Aux prés d'asphodèles :
Cela n'est pas vrai.
Il n'est pas de barque
Dans les Enfers ;
Il n'est pas d'Eaque
Ni de nautonnier ;
Ni de chien Cerbère
Et ni de Minos
Sévère
Pour juger les morts ;
Et ni d'asphodèles...
Les âmes fidèles
Ici ne sont rien —
Rien qu'un peu de cendre
Qui peut bien attendre
Éternellement.
Que finisse ou dure
Cette nuit obscure
Éternellement.

Pour qui n'a plus de bouche
J'ai beaucoup trop parlé.
Que si ceci te touche
Tant mieux !
Je te dis en hâte :
Adieu.

Consomme à loisir
L'amour délicate
Et le doux plaisir,
Car l'âme fidèle
Ne revoit jamais,
Jamais ce qu'elle
Aimait.

ANDRÉ GIDE.